

## 清代八股文における起講の作成法について (2)

滝野 邦雄

### ⑤ 對面擒

凡そ題に反正有りて擒えて俱に醒めざる者は、須らく對面法を用いて之を擒うべし。譬え  
ば對手（敵）に敵逢（ちょうど出くわす）し、兩馬 相い交わり、兩兵 相い接し、連戦  
すること数合 俱に勝負無し、其の黠（わるがしこ）き者 遂に刀を拖りて反走（身をひ  
るがえして逃げる）の計を爲し、其の追逼し近づき前むを待ち、身を轉じて擒住す。此れ  
亦た敵を制するの一奇なり。然れども須らく有筆なる者 之を爲すべし。拙笨（器用でない・愚鈍）なる人の若きは〔この解法を用いたならば〕、便ち拖泥帶水（だらだらする）し、  
轉折（轉換点）は不靈（生き生きとせず）にして、題意 反って之が爲に醒めず（『芹宮新  
譜』上卷・「對面擒」条・二十九葉）。

①反正：『讀書作文譜』に「〔反正〕董思白（董其昌）曰く、反正是乃ち文の大機關（最重要点）にして、  
知らざる可からざるなり。且そも『論語』の中、夫子の管仲を論ずるが如きは、若し之を正言すれば、則  
ち「管氏 禮を知らざれば、何等 明らかにし盡さん」と曰うに、却って又た「管氏にして禮を知らば、  
孰か禮を知らざらん」（『論語』八佾）と曰う。子賤（宓子齊）の賢を尊びて、友を取るは、若し之を正言  
すれば、只だ宜しく「魯 君子多し、故に取る所有りて以て其の徳を成す」と曰うべきなるも、却って  
「魯 君子無かりせば、斯れ焉くにか斯れを取らん」（『論語』公冶長）と曰う。此れ皆な反語なり。惟れ  
反にして、文 斯れ暢（よどみがない）なり、と」（『讀書作文譜』卷之七・六葉・「反正」条）。

題目に反正があつて、題意を適切に捉えながらもはっきりさせられないものは、「對面法」を用  
いて題意をとらえるべきである。それはたとえば、敵にちょうど出くわし、兩馬が近づき、数  
合にわたって戦ったものの、ともに勝負がつかないと、わるがしこい者は刀を引きずり退却す  
るという計略を行ない、接近して近づき進んでくるのを待って、身をひるがえして捕まえるよ  
うなものである。これは、敵を制するひとつの奇策である。しかし、これは文才のある者が行  
なうものである。そうでない者がこの解法を用いたならば、だらたらとしたものとなり、轉換  
点が生き生きとせず、題意をかえってはっきりさせられない、という。

[用例]

◎「爲人謀而不忠」<sup>①</sup>（『論語』學而）の起に云う；

我不能自爲謀也、而後乃就謀于人、苟人之爲我謀者、反不如我之自爲謀、是亦何藉乎人矣、  
則易地而觀我之自盡其心者、當勿于人乎是斬也、曷不省焉

(我<sup>みず</sup> 自から爲<sup>ため</sup>に謀る能わず、而して後に乃ち就きて人に謀る、苟<sup>は</sup> (果) たして人の我<sup>ため</sup>の爲に謀る者は、反って我<sup>みず</sup>の自から爲<sup>ため</sup>に謀るに如かず、是れ亦た何ぞ人に藉<sup>か</sup>りんや、則ち地を易えて我<sup>みず</sup>の自から其の心を盡す者を觀れば、當に人に「謀ることを」勿かるべきか。是れ斬<sup>み</sup> (あざける) なり、曷ぞ省みざるや)

對面し説き來り、一轉して便ち醒ます (『芹宮新譜』上卷・「對面擒」条・二十九葉)。

①『四書集注』には、「盡己之謂忠 (己を盡くすを之れ「忠」と謂う)」と注がある。また、この個所を直解した聖祖 (清・康熙帝) 御定『日講四書解義』は、

・・・・凡そ人「己を謀る (他人を欺く:『左傳』宣公十四年)」の事、必ず其の心を盡す。若し他人の爲<sup>ため</sup>に謀りて、便ち「己を謀る」の事と一般ならざれば、是れ不忠なり。吾 (曾子) 毎日自<sup>みず</sup>から人の爲<sup>ため</sup>に事を謀り、倘<sup>な</sup>お其の心を盡さざる者有るかを省みる・・・ (清・康熙十六年 (一六七七) 刊『日講四書解義』卷之四・論語上之一・「曾子曰吾日三省吾身為人謀而不忠乎與朋友交而不信乎傳不習乎」条・四葉)。

と理解する。

#### ◎「無友不如己者」 (『論語』學而) の起に云う；

且我思<sup>①</sup>獨學之無成也、因出而交天下士、而其人往往謝而絶之曰、子非吾友也、則以我之不如彼也、嗟乎、我不如人、人將謝我、人不如我、我乃曙而就之、此交友之大患也 (且<sup>そも</sup>そも我 獨學の成る無きを思い、因りて出でて天下の士に交わる。而して其れ人 往往にして謝して之を絶ちて曰く、子は吾が友に非ざるなり、と、則ち我の彼に<sup>し</sup>如かざるを以てなり。嗟乎、我の人に<sup>し</sup>如かず、人 將に我に「友となることを」謝 (辭退) せんとす、[または] 人の我に<sup>し</sup>如かず、我 乃ち曙<sup>ちか</sup> (呢) づき之に就く、此れ交友の大患なり)

①『禮記』學記に「獨學而無友、則孤陋而寡聞 (獨學にして友無ければ、則ち孤陋にして聞くこと寡し)」。

出筆 靈警なり (『芹宮新譜』上卷・「對面擒」条・二十九葉～三十葉)。

#### ◎「父母惟其疾之憂」 (『論語』爲政) の起に云う；

人子之于父母也、時而喜時而、其喜與俱<sup>ママ</sup> (懼) 固交相迫也、而亦知父母之心喜固無時俱<sup>ママ</sup> (懼)、且不足乃時時結而爲憂乎

(人の子の父母に于けるや、時にして喜び、時にして俱<sup>ママ</sup> (懼) <sup>①</sup>る。其れ喜と俱<sup>ママ</sup> (懼) とは固より交々相い迫ればなり、而して亦た父母の心の喜ぶを知れば固より時に俱<sup>ママ</sup> (懼) <sup>ママ</sup>る無し、且つ「父母が喜ぶのに」足らざれば乃ち時時に結びて憂<sup>②</sup>と爲すか)

①『論語』里仁に「子曰、父母之年、不可不知也。一則以喜、一則以懼 (子 曰く、父母の年は知らざる可からず。一は則ち以て喜び、一は則ち以て懼<sup>おそ</sup>る)」。

②『詩經』小雅・正月に「心之憂矣、如或結之 (心の憂うる、之を結ぶ或るが如し)」。

題は人子の心を説かず、父母の心を説く。原より是れ對面の説法なり。文 人の子の心に偏

従して説き起こし、父母に折入す。用筆 矯変なり(『芹宮新譜』上卷・「對面擒」条・三十葉)。

◎「求爲可知也」(『論語』里仁)の起に云う；

今使無端而遇一知己曰、吾久知子爲天下士、曷出其所有者以示我、而我茫然也、夫我豈不欲得知己之人哉、何以相對而轉增愧也、蓋我本無可以與人知者、而偏來知己之購求、則所以處此者、良難耳

(今、端無く(訳もなく)して<sup>ひと</sup>りの己を知るに遇いて、「吾 久しく子の天下の士爲るを知る、曷ぞ其の有する者を出し以て我に示さざる」と曰わしめば、我 茫然たるなり。夫れ我 豈に己を知るの人を得んと欲せざらんや、[ところが] 何を以て相い對して轉じて愧ずるを増すや、蓋し我 本より以て人と知らる可き者(人に知られるだけの学問・道徳)無ければなり。而れども偏來(遠くから来る)の知己の購求(たつての要求)あり、則ち此に處る所以の者は良に難きのみ)

構思 屈曲にして、運筆 幽折す。徑直の病に藥とす可し(『芹宮新譜』上卷・「對面擒」条・三十葉～三十一葉)。

◎「能好人、能惡人」(『論語』里仁)の起に云う；

人情未有不願好而去惡者也、乃爲我所好者或瞿然而自恐、爲我所惡者反欣然而自得、豈獨反于人情歟、蓋以其人本非能好能惡者也。

(人情 未だ「好」にして<sup>しか</sup>而して「惡」を去るを願わざる者有らざるなり、乃ち我の好む所と爲す者(人物)は或いは瞿然(驚く)として自<sup>みづ</sup>から恐れ、我の惡む所と爲す者(人物)は反って欣然として自得す。豈に獨り人情に反せんや、蓋し其の人 本とより「能好(能く好む)」・「能惡(能く惡む)」者に非ざるを以てなり)

「好」・「惡」を受ける者より逆に兩つの「能」字を折く。是れ對面の説法なり(『芹宮新譜』上卷・「對面擒」条・三十一葉)。

◎「未嘗至于偃之室也」(『論語』雍也)の起に云う；

今使長吏之庭、而朝有一人焉、曰亦既見止、暮有一人焉、曰亦既覲止、而爲宰者因此遂詡詡然曉於人曰、吾室中有某士焉、嗟乎、以此求士百不得一矣、若減明則不然

(今、長吏(地位がやや高い官員)の庭をして、朝に一人有れば、「亦既見止<sup>①</sup>(亦た既に見る)」と曰い、暮に一人有れば、「亦既覲止<sup>②</sup>(亦た既<sup>あ</sup>に覲う)」と曰う、而して宰と爲る者は此れに因りて遂に詡詡(自得の様子)然として人を曉れりとして曰く、吾が室中に某士有り、と。嗟乎、此れを以て士を求めれば、百に一を得ず。[澹臺] 減明の若きは[朝・暮に出入りする人物ではないので] 則ち然らず)

①②『詩經』國風・召南・草蟲に「未見君子。憂心忡忡。亦既見止。亦既覲止。我心則降(未だ君子を見

ず、憂心 忡忡たり。亦た既に見、亦た既に觀<sup>あ</sup>えば、我心則<sup>よろこ</sup>ち降<sup>ふ</sup>ばん」)。  
對面に從緊して人を説く。筆底(言葉遣い)區<sup>わづか</sup>に好し(『芹宮新譜』上卷・「對面擒」条・三十一葉)。

◎廖瀛海先生の「雖執鞭之士」(『論語』述而)の起に云う；

自人情之慕富而厭貧也、語以乘堅策肥之樂則榮之、語以馳驅奔走之役則賤之、嗚呼、庸詎知夫乘堅策肥者、固皆自馳驅奔走之中來耶

(人情の富を慕いて貧しきを厭うより、語ぐるに堅(堅牢な車)に乗り肥(肥えた馬)に策<sup>むちう</sup>①の楽しみを以てすれば則ち之を榮えとし、語ぐるに馳驅奔走の役を以てすれば則ち之を賤しむ。嗚呼、庸<sup>なん</sup>詎ぞ夫の乘堅策肥なる者も固より皆な馳驅奔走の中より來るを知らんや)

①『漢書』食貨志上に「乘堅策肥、履絲曳縞(堅(堅牢な車)に乗り肥(肥えた馬)に策<sup>むちう</sup>ち、絲(絹製のくつ)を履<sup>ふ</sup>み縞(絹)を曳<sup>ひ</sup>く)」。

用筆 尖冷なり(『芹宮新譜』上卷・「對面擒」条・三十一葉)。

◎坊刻の「舉一隅」(『論語』述而)の起に云う；

嘗見夫善學者當教者之盡言以告而無所隱也、心固樂之、而又轉若不甚樂之也、曰願先生且微舉其端而無竟其說也、惟教者之于人亦然

(嘗て夫の善く學ぶ者は、當に教うべき者の言を盡して以て告げ隱す所無きを見れば、心固より之を樂しむ。而れども又た轉じて甚だしくは之を樂しまざるが若きなり、願わくは先生 且に微かに其の端を舉げ而して其の説を竟(窮究)する無きなりと曰う。惟だ教うる者の人に于けるや亦た然るのみ)

教を受ける者の心上<sup>こゝろ</sup>従り説き來る。恰かも本位を折出するに好し(『芹宮新譜』上卷・「對面擒」条・三十二葉)。

◎「揜其不善而著其善」(『大學』第六章第二節)の起に云う；

今夫善則揚之、惡則隱焉、此君子待人之道也、不謂小人遂用此爲藏身之術、然其天良之不昧、亦正于此見矣

(今、夫れ善なれば則ち之を揚げ、惡なれば則ち焉<sup>これ</sup>を隱す、此れ君子の人を待(あしらう)の道なり、小人 遂に此を用いて藏身<sup>かくみ</sup>の術を爲すと謂わず、然らば其の天良(良心)の不昧(明亮)、亦た此に正されて見る)

①『禮記』禮運に「故政者、君之所以藏身也(故に政は、君の身を藏<sup>かく</sup>む所以なり)」とあり、鄭玄は「藏謂輝光於外、而形體不見。若日月星辰之神(藏とは、光を外に輝かせ、而して形體は見れざるを謂う。日月星辰の神の若し)」と注する。

ありま 現成 得て好し(『芹宮新譜』上卷・「對面擒」条・三十二葉～三十三葉)。

◎廖瀛海先生の「是天下之父歸之也」(『孟子』離婁上)の起に云う；

嘗思王者父天而母地，是天者天下之大父也，自西伯法天而有父母之稱，則西伯爲天下之父矣，夫父者天下之所歸也，若同歸于父，則似宜爲西伯之臣而不復謂天下之父矣，要豈所語于天下之大老哉

(嘗て思う王者は天を父とし地を母とす<sup>①</sup>，是れ天とは天下の大父なり，西伯(周文王)天を法として父母の稱有りてより，則ち西伯天下の父と爲す，夫れ父とは天下の歸する所なり，若し同じく父に歸すれば，則ち宜しく西伯の臣と爲りて，復た「天下之父」と謂わざるべきに似たり。要するに豈に天下の大老に語ぐ所ならんや)

①『白虎通義』一・「爵」に「王者，父天母地(王者は，天を父とし地を母とす)」。

曲折 學ぶ可し(『芹宮新譜』上卷・「對面擒」条・三十三葉)。

## ⑥高低擒

小題(起講)の開口は最も平行(文章が単調で平板な様子)を忌<sup>き</sup>く。總じて題の起伏に由り随い，上下の着き想うに解從せず。故に説き來りて常習の故を蹈み，全く丘壑無し。其の訣は高低一層より妙なるは莫し。譬えば兵を用いる者の兩軍對壘(敵と對峙する)す，或いは重兵(重裝備の軍)を遣りて敵の上游(前列)を控え，或いは偏師(遊軍)を用いて敵の背後を繞<sup>おさ</sup>出し。前後をして夾攻し旌旗(軍士)変色さすが如し。勁敵に遇うと雖も，亦た立どころに摧<sup>くじ</sup>かれざるは無し。故に余(鄭一鵬)諸法の外に于いて此の二種を備え録す。亦た試場の嚆矢(先触れ)なり(『芹宮新譜』上卷・「高低擒」条・三十三葉)。

小題(起講)の最初の部分は，最も文章が単調で平板であることを避ける。総じていうと[普通の人]は，題目の起伏にしたがうだけで，上下の着眼点を理解せずしたがわぬ。だから，説明して常習のやり方を蹈むだけで，丘も谷もない(起伏がない)ものとなる。[こうしたことを避ける]秘訣は高低一層法よりすぐれたものはない。たとえば，軍を指揮するが敵軍と對峙する時，重裝備の軍を派遣して敵の前列を抑え，遊軍を使って敵の背後を取り囲み，前後から挟み撃ちにして，軍士の顔色を変えさせるようなものである。強力な敵に出会っても，すぐには挫かれない。したがって，余(鄭一鵬)は，いろいろな解法以外にこの二種類の解法を記録しておく，という。

[用例]

◎「就有道而正焉」(『論語』學而)の起に云う；

且君子者道之宗也，行誼卓然，天下方共推爲有道，而羣思就正焉，豈君子而復轉求諸人乎，然理有岐途，功無止境，正不謂業成于己，而不思就教于人也

(且<sup>そも</sup>も君子は道の宗なり，行誼(品行)卓然(卓越)たり，天下 方に共に推して「有

道」と爲す、而して羣 正に就くを思う、豈に君子にして復た轉じて諸を人に求めんか、然れども理に岐途（分かれ道）有り、功に止境（終點）無し、正に業 己に成りて、而して人に就き教えらるるを思わずと謂わざるなり）

此れ高一層擒法なり（『芹宮新譜』上卷・「高低擒」条・三十四葉）。

◎「仁者安仁」（『論語』里仁）の起に云う；

仁爲天理之自然、而宅于吾心之无妄、固天下之至安者、自世多泊没于境遇、于是舉足皆爲危地、而問心亦少安居安得相遇于本然之天、而無適不然者哉、若仁者不然

（仁は天理の自然と爲し、而して吾心の无妄（でたらめでないこと：誠）に宅<sup>お</sup>り、固より天下の至安なる者なり、自から世 多く境遇に泊没す、是に于いて舉足（挙動）皆な危地と爲す、而れども心に問えば亦た少しく安居（じつと落ち着く）す、安んぞ本然の天に相い遇い、而して適<sup>ゆ</sup>くとして然らざる者無きを得んや、仁者の若きは然らず）

此れ高一層起法なり（『芹宮新譜』上卷・「高低擒」条・三十四葉）。

◎「好仁者、無以尚之」（『論語』里仁）の起に云う；

仁爲天德、固立于無上之域者也、自奪于後起之私物居其上、斯理屈其下矣、則欲體仁者、不必別有求理之方、但使還其最初之體、斯心專而理以得焉

（仁は天の徳と爲す、固より無上の域に立つ者なり、後起の私物に奪われて其の上に居るより、斯れ理 其の下に屈するなり、則ち仁を體せんと欲する者は、必ずしも別に理を求むるの方有らず、但だ其の最初の體に還らしむのみ、斯れ心専らにして理以て焉<sup>これ</sup>を得）

此れと〔前の〕「安仁」句と同一の擒法なり（『芹宮新譜』上卷・「高低擒」条・三十四葉～三十五葉）。

◎「恥躬之不逮」（『論語』里仁）の起に云う；

且人於行不逮言之後、亦知窃窃然恥之、以爲我躬之負愧寔多也、惜也其已晚也、今人之恥、恥在事後、古人之恥、恥在言前、事後者無補、言前者有濟、則試于不出時想之

（且<sup>そも</sup>も人 行に於いては言の後に逮<sup>およ</sup>ばず、亦た窃窃然として之を恥づるを知る、以て我躬の負<sup>そむ</sup>けりと爲し、愧 寔に多きなり、惜しきかな其の已に晩きや、今人の恥、恥は事の後に在り、古人の恥、恥は言の前に在り、事の後なる者は補する無し、言の前なる者は濟<sup>すく</sup>うこと有り、則ち試みに〔言の〕出ださざる時に于いて之を想え）

此れ後一層擒法なり（『芹宮新譜』上卷・「高低擒」条・三十五葉）。

◎「難乎免於今之世矣」（『論語』雍也）の起に云う；

士君于有轉移世道之責、而僅思求免于儕俗、殊非素心所敢出也、然求免而克免焉、斯已幸



矣，特恐操不近人情之面目，而獨立於舉世同風之目，其所以自處者，良不易耳，聖人原非教人求免

(士君 世道を轉移するの責有りて僅かに儕俗(世俗に合わせる)を求免するを思うに于いて、殊に素心(本心)に非ざれば敢て出ださざる所なり、然らば求免して克く<sup>よく</sup>焉<sup>こゝ</sup>を免れんか、斯れ已に幸いなり、特に人情の面目に近からざるを操り、而して獨り舉世同風の目を立つを恐る、其れ自から處る所以の者は、良に易えざるのみ、聖人 原より人に求免するを教うるに非ず)

高一層起[法]なり、極めて地歩を占む(『芹宮新譜』上卷・「高低擒」条・三十五葉～三十六葉)。

◎「不可以作巫醫」(『論語』子路)の起に云う；

今夫擇術必求其高，而托業務于其大，此固君子之所以立身也，顧立身必本于居心，心之不常，則無論高且大者之不足與有爲也，即區區賤役，亦有不<sup>た</sup>敢爲之輕許者

(今、夫れ術を擇ぶに必ず其の高きを求む、而して業務を其の大に托す、此れ固より君の身を立つ所以なり、顧だ身を立つは必ず居心に本づく、心の常ならざれば、則ち高にして且つ大なる者の足らざると爲す有るとを論ずる無きなり、即ち區區たる賤役も、亦た敢て之が爲<sup>ため</sup>に輕しく許さざる者有り)

亦た高一層起法なり(『芹宮新譜』上卷・「高低擒」条・三十六葉)。

◎「非擇而取之」(『孟子』梁惠王下)の起に云う；

今夫擇地而蹈，匹夫且然，況于有土之君哉，顧自其後而觀之，興王之地有所發祥，必非無意于取也，由其先而觀之，播遷之餘，隨地而安，斷非有心以擇也，如太王是已

(今、夫れ地を擇びて蹈むは、匹夫も且に然り、況んや有土(封土のある)の君に于いてや、顧だ其の後より之を觀れば、王[業]を興すの地の發祥する所有るも、必ず意無くして取るに非ざるなり、其の先より之を觀れば、播遷(流離)の餘(後)、地に隨いて安んず、斷じて心有りて以て擇ぶに非ざるなり、[周の]太王の如きは是れなり)

①『詩經』商頌・長發に「濬哲維商，長發其祥」(濬<sup>しん</sup>哲<sup>てつ</sup>なる維<sup>こ</sup>れ商，長く其の祥を發す：智慧深い殷の始祖の契は、長く祥を開いて後世に伝えた)。

(『芹宮新譜』上卷・「高低擒」条・三十六葉)。

◎「燕人畔，王曰，吾甚漸(慙)于孟子」(『孟子』公孫丑下)の起に云う；

庸人見已然，君子見未然，方齊之伐燕也，王方抵掌而談，氣盛志滿，若可長爲子孫計者，而私憂過計以爲燕不可滅者獨一孟子，未幾而燕人果以畔告矣

(庸人 已に然るを見、君子 未だ然らざるを見る、方に齊の燕を伐つや、王 方に抵掌し

て談じ、氣 盛んにして志 満ち、長く子孫の爲に計る可き者の若し、而して私憂もて過ぎ計り、以て燕は滅ばす可からずと爲す者は獨り一りの孟子なり、未だ幾ばくならずして燕人 果して畔くを以て告ぐ)

①『戰國策』秦策一に「蘇秦見說趙王於華屋之下、抵掌而談（蘇秦 趙王に華屋（山の名）の下に見え説き、<sup>たなこころ</sup> <sup>おさ</sup> 掌を抵えて（恭しい態度）談ず）」。

②『荀子』富國に「墨子之言、昭昭然爲天下憂不足。夫不足、非天下之公患也、特墨子之私憂過計也（墨子の言（言説）は、昭昭然として天下の爲に足らざるを憂う。夫れ足らざるは、天下の公患に非ざるなり、特に墨子の私に過計を憂うるなり）」。

（『芹宮新譜』上巻・「高低擒」条・三十六葉～三十七葉）。

## (2) 『初學啓悟集』

『幼童舉業啓悟集』（乾隆十一年〔一七四六〕汪承忠自序）では、起講をつぎのように解説する。起講は乃ち文章の入頭の處なり。開口は即ち須く切題（題旨に合致する）なるべし。寛泛（意味内容が広い）なる可からず。然れども却って含蓄あるを要す。最も説き盡くすを忌く。説き盡くせば則ち提掇（持ち出す）の處は又た是れ頭上より説き起こし、便ち重複するを覺ゆ。厭う可き所なり。所謂ゆる切ならんと欲して盡さんと欲せざる者なり。其の法は、反起正接なる者有り、正起反收なる者有り、先開後合なる者有り、亦た先用合講後反漾なる者有り、純用正講なる者有り。此の反講を用いて〔題〕脉を領むるに至り正位（中心となる方向性）を掉轉（回轉）する者有り、数層 轉折（方向を転じる）して下る者有り、小講（起講）の内に中間（中間点）に即伏して柱の脉を立つる者有り。要は題〔目〕を相て筆を運ぶに在り。一律に論ずる可からざるなり。○起講の開手は三四句を用いて渾起する者有り。本題の二三字を拈りて明起する者有り。次は一句、或いは四句もて承接す。起局は工練（巧みに工夫する）切當（適切）を以て主と爲すを要す。而して開合し分對（分けて列する）の中、更に須く一氣（語氣）もて貫注すべし。後は三四句、或いは兩三句を以て收を作る。起講の弊端（弊病）に至りては、亦た應に字法を用いるべきに有り。口氣題の如きは、則ち「若曰」・「若謂」・「意謂」以て「今夫」・「且夫」・「嘗觀」等の字に至るまで用いる可からざる無し。断倣するが若き者は、止だ宜しく「今夫」・「且夫」・「從來嘗觀」等の字を用うべし。○起講の對〔句〕なる者は整齊（秩序だって筋が通る）なるを要し、散（展開）して要を作す。流暢に對〔句〕する者は、多く實を以て主を形とし。散（展開）する者は多く虚を以て寔（實）を形とす。實・主と虚・寔（實）を審らかにするの外、難事無し（『幼童舉業啓悟集』二集・「起講法」条）。

①實：『斯文規範』に「實とは客なり。乃ち主人 請う所の客なり。主 必ず客有り。客 必ず主有りて、方に一堂欣暢の樂しみ有り。則ち之を文に通ずるに、凡そ文中に題面を直敘すれば、便ち直率なるを覺ゆ。〔そこで〕必ず主に客有り、客に主有れば、則ち文字 方に情趣（意向）有り。就ち主客 一堂に聚處し



歡欣（よろこび）暢遂（成就）すると相い似たり。故に之に名づけて「賁」と曰う。其の客を以て主を形とするを言うなり……」（『斯文規範』卷之七・七葉・「一曰賁」条）。

起講は、八股文の論説を説き始める箇所である。最初は題旨に合致しなければならない。意味内容を広げてはいけない。却って含蓄のあることが必要である。説きつくしてしまうことを最も避ける。説きつくしてしまえば、提示した箇所は頭から説明したことになってしまい、重複したような気分になるからである。これは避けるべきことである。いわゆる「合致させようとしながらも、説きつくさないようにする」ものである。その解法には、反起正接・正起反收・先開後合のようなものがある。また先用合講後反漾のようなものもある。純用正講というものもある。反講を用いて〔題〕脉を領めて正位（中心となる方向性）を掉轉（回轉）するものもあり、数段落の方向を転じてゆくものもあり、小講（起講）の内で中間点に即して題目の脉を立てるものもある。要は題目をみてどの様な文章を書くかにある。一律に論ずるべきではない。○起講の最初は、三四句を用いて渾然と始めるのがあるし、題目の二三字を拈（つまみ）って明起（はっきり）と書き始めるものもある。そして、一句もしくは四句で承けて続ける。最初は、巧みに工夫して適切なものを主とすることが必要である。そして開合・分對（分けて列する）して一氣（語氣）を注ぎ込む。後の部分は、三四句または二三句で「收」を書く。起講の弊病は、きまつた字句を用いるべきところにある。口氣題では、「若曰」・「若謂」・「意謂」から「今夫」・「且夫」・「嘗觀」などまですべて使える。断定するようなものだったら、「今夫」・「且夫」・「從來嘗觀」などを用いるべきである。○起講の對〔句〕は、秩序だって筋が通っていることが必要で、散（展開）して要点を作成する。流暢に對〔句〕する者は、多く賁（間接的な方法）で主（主題）を形（明らかにする）とする。散（展開）する者は多く虚（漠然とした方法）で實（実体）を形（明らかにする）とする。賁・主と虚・寔（實）を審らかにする以外は、難しいことはない、という。

#### [用例]

『初學啓悟集』にある用例は、入題とひとまとまりになって例示されている。そこで、『初學啓悟集』の用例については、「入題」を再検討する際の『初學啓悟集』条で取り上げたい。

### (3) 『初學玉玲瓏』

江蘇古棠（六合）の徐瑄（敬軒）の『初學玉玲瓏』（乾隆十五年〔一七五〇〕序）は、起講をつぎのように説明する。

起講は、一篇の開講の處と爲す。只だ是れ題の大意を寫くのみならず、宜しく虚なるべし、而して宜しく實なるべからず。然れども又た寛泛（意味内容が広い）なるを得ざれば、通套子（慣用の形式）に落ち、題の眞神・本相を失うを致す。務めて開門見山（最初から直ちに本題に入る）なるを要むれば、方に好し。其の法は、起・承・轉・合（收）の反起正

收・正起反收の同じからざる有り。大概は、起もて一二句とし、承もて二三句とし、轉もて三四句とし、收もて一二句とするなり。總じて其の口氣の如くす・其の神情に肖るを以て妙と爲す。其の中 又た正擒題意起有り、借擒題字起有り、借映作起有り、旁襯作起有り、引証作起有り、從正旨違起有り、透下意逆起有り。然る後に題面を轉合する者あり。更に全てに反説・轉筆を用い、上文を便ち領めて落孤（個々の段落が孤立することを抜け出る）する者有り。〔解法は〕種種にして一ならず。「神にして之を明らかにするは、惟だ人に在り<sup>①</sup>」。此れ皆な口氣に入る者の爲に之を言う。惟だ記事題は、須らく口氣を入れるべからず。己意を以て斷作すれば可なるのみ。○開首に「若曰」・「意謂」・「嘗謂」・「以爲」・「今夫」・「嘗思」・「聞之」・「從來」等の字有り。蓋し口氣題は、「若曰」・「意謂」・「以爲」・「嘗謂」・「若今夫」・「嘗思」・「聞之」・「從來」を用う可し。則ち只だ斷作に宜しき者のみ之を用うのみ（『初學玉玲瓏』一冊・「起講」条・十六葉）。

①『周易』繫辭上傳・第十二章に「神而明之，存乎其人（神にして之を明にするは，其の人に存す）」。

起講は、八股文の論説を説き始める箇所である。出題された題目の大意を書きだすだけでなく、虚（漠然）であるべきで實（はっきり）であるべきでない。しかし、意味内容が広がらないと、慣用的なものとなり、出題された題目の精神や本質を失うことになる。務めて最初から直ちに本題に入るようにすればよい。その解法は、起・承・轉・合（收）を用いた反起正收・正起反收などの異なったものがある。大体は、起を一二句とし、承を二三句とし、轉を三四句とし、合（收）を一二句とする。その人の口吻のように書き、その気持ちに沿わせることをすぐれたものとする。また、正擒題意起・借擒題字起・借映作起・旁襯作起・引証作起・從正旨違起・透下意逆起がある。そうした解法の後に題の字面を轉合するものがある。さらには、全てに反説・轉筆を用い上文を領めて落孤（個々の段落が孤立することを抜け出る）するものもある。解法は、様々でひとつではない。神にして明察なものを發揮できるかは、その人にかかっている。これはすべて起講に口氣を用いる者のためのものである。ただ題目が記事題であれば、口氣を用いた書き方は用いない。自分の考えで判断作成すればよい。起講の最初には、「若曰」・「意謂」・「嘗謂」・「以爲」・「今夫」・「嘗思」・「聞之」・「從來」等を用いる。題目が口氣題であれば、「若曰」・「意謂」・「以爲」・「嘗謂」・「若今夫」・「嘗思」・「聞之」・「從來」を用いる。ただ自分の考えで判断作成に用いてよいものだけをもちいるだけである、という。

#### 〔用例〕

題目：有朋自遠方來（『論語』學而）

且吾學中原有及人之事也，特我未能以自淑，則人不我信，雖有以招之，何從而至吾前乎，有如時習而説

（且<sup>そも</sup>も吾が學の中に原<sup>もと</sup>より人に及ぼすの事有り，特に我 未だ能く以て自から淑<sup>よ</sup>からざれば則ち人 我を信ぜず，以て之を招くこと有りと雖も，何に従いて吾が前に至り，時に習

いて説ぶが如き有らんや)

此れ正起反收法なり (『初學玉玲瓏』一冊・「起講」条・十七葉)。

題目：其爲人也孝弟 (『論語』學而)

有子若曰人生之事業無窮期也，豈僅家庭無愧行己哉，然而能爲人子能爲人弟，則天性之感已多矣，吾因是重有念于爲人也

(有子<sup>かくのこと</sup>若く曰く，人生の事業は窮期 (完結する時) 無きなり，豈に僅かに家庭に己を行<sup>①</sup>うに愧じ無けんや，然り而して能く人の子と爲る・能く人の弟と爲れば，則ち天性の感 已に多し，吾<sup>これ</sup>是に因りて重ねて人と爲るを念<sup>おも</sup>うこと有るなり)

①『論語』公冶長に「子謂子產，有君子之道四焉，其行己也恭 (子 子產を謂う，君子の道四有り，其の己を行なうや恭)・・・」。

此れ透下收題法なり (『初學玉玲瓏』一冊・「起講」条・十七葉)。

題目：巧言 (『論語』學而)

且夫言者心之聲也，我誠有可以爲人所信者，亦何必鼓如簧之舌哉，而無如工于媚人者，謂不言則已，言則不可以不好也，今天人孰不有言哉

(且<sup>そも</sup>も夫れ言とは心の聲なり，我 誠に以て人の信ずる所を爲す可き者有り，亦た何ぞ必ず鼓するに簧の舌の如きや<sup>②</sup>，而して人に媚びるに工みなるが如き無き者は，言わず則ち已むと謂う，言えは則ち以て好からざる可からざればなり，今 天・人 孰れぞ言うこと有らざらんや)

①『詩經』小雅・鹿鳴に「吹笙鼓簧，承筐是將 (笙を吹き<sup>こ</sup>う簧を鼓し，<sup>きよう きぎ</sup>筐を承<sup>おこな</sup>げて是れ將う)」。

此れ反起正收法なり (『初學玉玲瓏』一冊・「起講」条・十七葉)。

#### (4)『増訂初學秘訣』

桐城の吳肖元 (踰龍) の『増訂初學秘訣』(乾隆三十年自序／同文堂梓行)は，起講を「起講總論」・「論起講層次法」・「論起一層法」・「論承一層法」・「論轉一層法」・「論收一層法」に分けて，つぎのように説明する。

先ず起講の総論について解説する。

##### 起講總論

起講とは，全篇の綱領 (要点) を扼<sup>おさ</sup>えて，其の主旨 (大要) を發す。一篇の文章 此の開頭より説き起こす。乃ち文章の冠冕なり。猶お人身の元首のごとし。斷じて草々に混過す可からず。蓋し破 [題]・承 [題] は，皆な己意に就きて斷じて做す。是れ我が自己の口中の説話なり。故に古人に于いては稱するに「聖人」・「賢者」等の字を以てす。起講の若きは只だ記事 [題] の斷じて<sup>な</sup>做すを除くの外，盡く口氣に入る。是れ我 聖賢に代わりて説

話（見解を述べる）するなり。如し題〔目〕が是れ孔子の語なれば、我は便ち孔子を學倣（学んでそのものとなる）して講話せんことを要す。題〔目〕が是れ孟子の語なれば、我は又た孟子を學倣して講話せんことを要す。我は即ち是れ彼なり。彼の口中 應に〔經書などに書かれた〕聖賢等の字を以て〔その聖賢をであると〕自稱するべからず。須らく是れ設身處地（他人の立場で考える）なるを要すべし。如え<sup>たと</sup>ば君公（諸侯）に對するの語は、則ち書案（机）の上に凜然（威嚴のある）たる天顏（天子の顔）の咫尺（距離が近いこと）なりて我は鞠躬（恭敬謹慎する）する臣列にあり、之を言いて凜凜（非常に恐縮する）たり。弟子に示すの語は、則ち几席の旁に宛然とし、生徒侍立して我は端として師位に居り、「之に誨<sup>おし</sup>えて諄諄<sup>②</sup>」。搃じて是れ如何様なる人なり・如何様なる事なり・如何様なる時勢なるを看て、當に如何様な話を説くべきかを要す。各々身分・地位有り、各々来脉・去路有り。又た各々虚神・實理有り。移歩（移動する歩調）は、便ち換形す、須らく細心に體貼（細心に體會する）し、全題の神に肖すべし。又た虚虚に籠罩<sup>③</sup>（包む）して全篇の局（局面）を養（取り出し）し、籠統（概括的）・寛泛（意味内容が広い）の語を説く可からず。亦た死板寔（實）硬（硬直化する）の語を説く可からず。切にして拘わらず、虚にして泛<sup>④</sup>（ひろく述べる）ならずを要す。春雲乍吐（春の雲がたちまち吐きだされる）・曉日初升（朝日が昇り始める）は、太<sup>はな</sup>はだ近ければ其の偏るを恐れ、太<sup>はな</sup>はだ遠ければ其の迂なるを恐るが如し。〔つまり〕太<sup>はな</sup>はだ短ければ〔題目に〕促（近づく）し易く、太<sup>はな</sup>はだ長ければ〔題目を〕盡し易し。〔題目に截去された〕上文有れば上文を截清するを要す。絲毫（ごくわずか）も連ならざれば、既に轉じて再び上（截去された上文）を融〔合〕するを為す。亦た硬（むりやり）に上文の字面を將<sup>も</sup>って囫圇（まるごとすべて）填寫（書き連ねる）する可からず。〔題目に截去された〕下文有れば本位を勒住（おさえとどめる）するを要す。絲毫（ごくわずか）も溢<sup>あふ</sup>れざれば、或いは反逼<sup>⑤</sup>を用い、或いは神を以て注し、迹相（はっきりとしない箇所）に着（着目）せず、油腔（実のない上っ面）に入らざるを要す。大局（大体）は、起承轉収・反正開合に外ならず。而して数層の中、開首の一層は尤も忽せにする可からず。蓋し場中の提筆の文を看<sup>み</sup>るに、着眼するは尤も此の處に在り。開首の圈（圈点をつける）動けば、則ち一氣（語氣・氣脈）に圈去<sup>⑥</sup>く。筆 停まる能わざれば、中間 縦<sup>たと</sup>え字句の小疵有るも、亦た帶過して〔小疵を〕覺えず。故に先正 入泮（生員）の掄元（第一名に選ばれる）を論ずるに、全副<sup>すべて</sup>の精神は、尤も首篇に在り。而して首篇は尤も起講並びに前半に在り。故に劈頭の一二語もて能く題〔目〕の通身（全部）をして雪亮（明白）ならしむ。文の通篇の勢いを得る者は、擒題の諸法より妙なるは莫し。其の類 一ならずと雖も、俱に詳しく後に列す。但だ題を看<sup>み</sup>て之を施すを要す。先輩の起講 語（題目の字面）に着〔目〕すこと多からざるも、題意 透露（はっきりさせる）するに至る。然れども未だ枯寂（うるおいがない）なるを免れず。到底 時眼（人々の眼光）に入らず。其の妙處は止だ題の總綱（大綱）・怡興（未詳）を渾括（總括）するに在り。提比の承接するに

一氣（語気）は藕斷絲連（蓮根は切れても糸はつながっている）なるが如し。仍お貼（黏）連（くつつく）なるも無痕なるを覺ゆ。後比に入るに比は相い生じ、起より末に至るまで通篇直ちに一股の如く説き去るを覺ゆ。時下の俗法に似たらず。原より題〔目〕の處より畫斷（判斷）し、<sup>べつ</sup>別に頭緒（発端）を起こす。起講を<sup>も</sup>將って<sup>べつ</sup>別に一篇の小文字を成す。開首の起の一層は、即ち提比の意なり。承の一層は、即ち中比の意なり。収の一層は、仍お後比の餘意なり。小講と全篇（八比の部分）とは兩つの樞（きりかぶ）なり。此れ初學の宜しく急ぎ講じて深く戒むべき所の者なり。蓋し入比は人の四肢の如し。起講は則ち人の元首の如し。元首は必ず四體と相い稱す。故に五官（耳・目・鼻・口・姿形）端好（きちんとする）・方頭大面（角ばった頭の福相）・氣色（顔色）鮮明なれば、一見して便ち爽目（すがすがしい）ならしむ。若し四體長大・元首尖小にして醜惡たれば、觸目して生厭せざるを能くせんや。茲れ選する八類法は、皆な淺顯（わかりやすく）明白にして、運筆 鬆（軽やか）なり、而して題〔目〕の緊を<sup>とら</sup>擒う。初學をして取る所の法を知らしめば、則ち他日の採芹<sup>⑥</sup>すること芥を拾うが如し。掄元・奪魁（第一名となる）俱に此れに基づく。輕視すること勿れ（『増訂初學秘訣』一葉～二葉）。

①天顔咫尺：『左傳』僖公九年に「天威不遠顔咫尺（天威 顔を遠ること咫尺ならず：天顔を去ること一尺の近さではあまりにも恐れ多い）」。

②誨之諄諄：『詩經』大雅・抑に「誨爾諄諄（爾に<sup>おし</sup>誨うること諄諄たり）」

③籠罩：『斯文規範』に「此れ上法（虚籠）と名を異にするも實は同じ」（『斯文規範』卷之六・十七葉・「一曰籠罩」条）とあり、「虚籠」は「題前に先ず題の大意を虚籠するを言う。其の法に通ずれば、凡そ上載を講じて下載を虚籠す、或いは本題を講じて、下文を虚籠す。俱に虚籠に屬す」（『斯文規範』卷之六・十七葉・「一曰虚籠」条）。

④泛：『斯文規範』に「題を發揮せんと欲するを言う。先ず其の理を泛（ひろく述べる）し、而して後に發揮す……」（『斯文規範』卷之六・十八葉・「一曰泛論」条）。

⑤反逼：『斯文規範』に「逼は、<sup>せまる</sup>迫なり。字面の未だ出でざるの先に於いて反筆を用い、以て題中の字面に逼迫するを言うなり」（『斯文規範』卷之六・十五葉・「一曰反逼」条）。

⑥采芹：『詩經』魯頌・泂水に「思樂泂水、薄采其芹（思に泂水を楽しむ、<sup>ここ</sup>薄か其の芹を<sup>いさ</sup>采る）」とあり、後に縣學の生員になることを指すようになる。

起講は、全編の要点をおさえて、大要を述べる。八股文は、この起講から始まり説き起こす。すなわち文のかしらである。人の頭のようなものである。いいかげんにごちゃごちゃとごまかしてはいけない。思うに破題・承題は、すべて自分の考えにしたがって判断して作成する。これは、自分の口から出たことばである。そのため、古人を持ち出すと「聖人」・「賢者」等の文字を用いる。ところが、起講では自分で断定して書く記事題以外は、すべて話し言葉となる。自分が聖賢に代わって見解を述べるのである。もしも、題目が孔子の言葉であれば、孔子に学び孔子となって見解を述べる必要がある。題目が孟子の言葉であれば、孟子に学び孟子



となつて見解を述べる必要がある。自分は、すなわち〔題目に出てくる〕他人なのである。ただし、その文は〔経書などに書かれた〕聖賢の文をもちいて〔その聖賢であると〕名乗るべきではない。是非とも聖賢などの立場で考えるべき必要がある。諸侯に対しての言葉であれば、机上において厳肅に諸侯に近づき、自分は恭敬謹慎の鞠躬の礼で臣下の列に並んで、非常に恐縮していることを言う。弟子に示す言葉であれば、ひじ掛けや敷物の傍らで謙遜しておとなしく弟子がひかえ、自分はまさに先生の位置にいて、丁寧に反覆して教える。まとめていうと、どのような人であるのか、どのような事であるのか、どのような状況であるのかを観察して、どのように説き明かすのかが必要である。それぞれに身分や地位があり、それぞれの来脉や去路があり、又たそれぞれに虚神・實理がある。移動する歩調は、変化する。そのため細部まで子細に理解し、題目全体の気分（神）に似せるべきである。抽象的に題目全体の局面を取りだし、おおまかにひろく述べるべきではない。また硬直化した言葉遣いもいけない。適切であるものの固執せず、抽象的であっても一般的すぎない必要がある。春雲乍吐（春の雲がたちまち吐きだされる）・暁日初升（朝日が昇り始める）のは、たいそう逼ってくるようであればその逼ってくることを心配し、たいへん遠ざかりそうであればその遠くなることを心配するようなものである。〔つまりこの起講も〕たいへん短ければ〔題目に〕近づき（促）すぎることになり、<sup>はな</sup>太はだ長ければ〔題目を〕言い尽くしてしまうことになる。題目に截去された上文があれば、その上文を截清することが必要である。丝毫（ごくわずか）も関連づけできないのであれば、ふたたび転回して截去された上文を融合する。亦た硬（むりやり）に截去された上文の字面<sup>じづら</sup>を図圖（まるごとすべて）填寫（書き連ねる）べきではない。題目に截去された下文があれば本位を勒住（おさえとどめる）することが必要である。丝毫（ごくわずか）も溢れてこないのならば、反逼法を用いるか、あるいは題目の焦点を注ぎ込み、迹相（はっきりとしない箇所）に着目せず、油腔（実のない上っ面）に落ち込まない必要がある。大体は、起承轉収・反正開合に他ならない。そして、その数段落の中で、最初の一段はもっともゆるがせにするべきではない。思うに試験場で書かれた文章を見る（採点する）時、よく目につくのはこの個所になる。開首の圈（採点をつける圈点）を付け始めれば、一気に圈点をつけてゆくことになる。中間部にたとえ小さな欠点があっても、そのままにして欠点に気が付かない。だから、前代の名人たちは第一名に選ばれた生員の文章を論ずるのに、すべての精力をまったく最初の部分に尽くす。また、その最初の部分は、起講やその起講の前半部にある。だから、最初の一二語でもって題目のすべてを十分に明瞭にさせることができる。文章すべての勢いを得ようとするものは、擒題の諸々の方法よりいいものはない。その種類はひとつではないけれども、すべて詳しく〔文章の〕後ろで説明する。ただ題目を見てそれを用いる必要がある。先人の起講は、題目の字面に着目するものは多くないものの、題目の意図をはっきりさせている。しかし枯れてうるおいがないことを免れない。これでは、到底人々の注目を得ない。起講の秘訣はただ題目の大綱を総括することにある。提比（八股の最初の個所）と起講とを承け続



けるには、そのつながりをあたかも蓮根は切れても糸ではつながっているような状態にする。くつついてはいるものの、その痕跡は見当たらないような感じにする。後ろの後比の部分に入ると、対句はお互いに意味を持つ。最初より最後まで全体をひとつの対句のようにする感じである。最近の俗法に似たものにしない。もとより題目から判断し、べつにその発端を始める。起講を用いてべつの文を作るのである。起講の最初の起の部分（一段）は、後のうしろの八股の部分の提比の意味あいがある。承の部分（一段）は、後のうしろの八股の部分の中比の意味あいがある。收の部分（一段）は、後のうしろの八股の部分の後比の補足の意味あいがある。小講（起講）と全篇（八比の部分）とは、ふたつの楸（きりかぶ）である。初学者は、急いで深く気を付ける箇所である。思うに八股の部分は人間の四肢のようなものであり、起講は人の頭のようなものである。頭は必ず四肢と一体となっている。五官（耳・目・鼻・口・姿形）がきちんとして、角ばった頭の福相で、顔色がはっきりしていれば、一見して爽やかな気分となる。もしも四肢が長く、頭が突起して小さく醜悪であれば、一見して嫌悪感を生じさせることをどうすることもできない。ここに選んだ八種類の解法は、すべてわかりやすく明白で、筆使いも軽やかなものである。そして題目の要点をとらえている。初学者が用いる解法を理解すれば、他日生員となること塵芥を拾うようなものである。第一名となるのもすべてこれに基づく。軽視することがないようにせよ、という。

続いて「起講」の段落について説明する。起講は起・承・轉・收の四段落に分けて説かなければならない。その四段落は意味が一貫したものである。もしも、この四段落に分けて説かないと、起講は平板なものになってしまうという。

#### 論起講層次法

起講の擒題の法は、入（諸）類を集中するより妙なるは莫し。然れども此れ亦た扣題（テーマにぴったり合わせる）の大概を論ずるに止まるのみ。意を立て措詞（字句の選択）に至れば、第一層次（文脈）は清（はっきりする）なるを要す。而して層次（文脈）中の語氣は貫くを要す。若し層次（文脈）清（はっきりする）ならざれば、縦<sup>たと</sup>え好き意・好き詞有りて扣題（テーマにぴったり合う）するも、亦た是れ生柴（生乾きの木柴）の捆（たばね）を亂すなり。若し層次中の語氣 貫かざれば、即ち好き意・好き詞有りて題を擒<sup>とら</sup>えるも、仍お散錢の串（つながり）無きが如し。大約毎個の起講中に定めて四層を要す。起の一層、承の一層、轉の一層、収（收）の一層なり。起は即ち是れ開、承は即ち是れ中間の一つの紐（かなめ）、収は即ち是れ合なり。倘し前起に合の一層を用い、題〔目〕に靠<sup>よ</sup>りて死説（生き生きと説明しない）すれば、後は反って開の一層を用い、漸く説開（明白に説く）去す。是れ開合法を將<sup>も</sup>って倒<sup>さかさ</sup>に合開法を成す。亂舞梨花（梨花槍法）に幾からんか。〔起講は〕長ければ則ち八句・九句なり。蛇を畫きて足を添え（蛇足）して以て太だ長きに至る可からず。短きも亦た六句・七句を要す。丈を縮めて尺と爲し、以て太だ短きに至る可からず。所謂ゆる一氣（語氣）もて起・承・轉・合<sup>マ</sup>（收）の數層の中に貫注するものなり。

分看するに起は是れ一氣（語氣）ある幾つかの句、承・轉は是れ一氣（語氣）ある幾つかの句、収も又た是れ一氣（語氣）ある幾つかの句なり。合看すれば則ち数層は仍お是れ一氣呵成（首尾一貫している）するものなり。若し全く起・承・轉・収の層次無ければ、只だ糊塗なる一氣（語氣）なり。七句八句を平拖（平らに引きのばす）し、奄奄（弱弱しく）として振るわざれば、則ち層次 清（はっきりする）ならず。便ち起講を成さず（『増訂初學秘訣』二葉～三葉）。

起講において題目の意味をとらえる方法は、いろいろな方法を集め合わせるよりすぐれたものはない。しかしこれもまた題目のテーマにぴったり合わせることの大枠を論ずるにとどまっているだけである。意味を述べ字句を選択するに至れば、第一段をはっきりさせることが必要である。そして文中の語句は意味が連なっていることが必要である。もしも層次（文脈）がはっきりとしたものになっていなければ、たとえすぐれた意味・すぐれた言葉遣いで扣題（テーマにぴったり合う）していても、これは生乾きの柴が捆（たばね）を乱すようなものになる。もしも層次（文脈）の語句の意味が連なっていなければ、使い古された錢が束にできないようなものになる。だいたいすべての起講には四つの段落を作る。起の一段、承の一段、轉の一段、収の一段である。起は始まりであり、承は中間の紐（かなめ）、収はまとめになる。もしも前半部にまとめの段落を用い、題目にしたがって生き生きと書かなければ、後半部は始まりの段落として、はっきりと説明を行なう。これは、開合法の解法を用いてさかさまにして合開法とするものであり、梨花槍術を乱舞するのに近い。そもそも、起講は、長くても八句・九句とする。蛇足してたいへん長くすべきではない。ただし短くても六句・七句が必要である。丈であるものを縮めて尺とし、たいへん短いものにすべきではない。いわゆる語氣が、起・承・轉・収の數層（数段）に貫通するものである。個々にみて行くと、起は一氣（語氣）の通じたいくつかの句からなり、承・轉も一氣（語氣）の通じたいくつかの句からなり、収もまた一氣（語氣）の通じたいくつかの句からなり。そして全体としてみれば、これらの數層（数段）は、やはり首尾一貫して氣が貫通しているものである。もしもまったく起・承・轉・収の段落がなければ、ただぼんやりした一氣（語氣）となる。七句八句に引き延ばすだけで、弱弱しくてふるいおこさないようならば、層次（文脈）ははっきりしない。起講にならないのである、という。

そして、起講の起・承・轉・収の四段落について説明をおこなう。まず、「起」の段落について解説する。

#### 論起一層法

起は起頭の第一層を謂う、開なり。所謂ゆる擒題の入法は俱に此の一層の運用に在り。盖し起講は一篇の綱領（要点）と為る。而して起講の開も又た起講の綱領（要点）と為る。綱を舉げて必ず提綱するは（要点をつかむ）、衣を振え（衣裳を整える）は必ず挈領（襟をつかむ）するが如し。最も題の巔に高踞（どっしりと座る）し、起き得て勢いあるを要す。故に起は須く一頂を突起し、晴空に陡插（奮い立たせる）すべし。最も平衍（平板）を忌<sup>き</sup>。

く。譬えば地中の龍脉は必ず来處に于いて危峰（高峻な山峰）を突聳するが如し。<sup>これ</sup>是に由りて或いは伏し、或いは見われ、或いは開き、或いは来る。便ち處處に勢い有り。平岡なる懶龍なれば、一衍数里なるが如ければ、<sup>あ</sup>踏かず落ちず、<sup>つまず</sup>轉せず結ばず、便ち<sup>こ</sup>是の地にあらず。故に起の處の兩句・三句は、最も陡峻（高く険しい）にして、絶えて挖踏（だらだらする）せず、一たび開口（説き始める）すれば、便ち英氣勃勃（英氣に満ちている）たるを要す。<sup>も</sup>若し起き了り又た起こせば、則ち頭上 安頭（どっしりする）し、疊架（文章がくどくなる）を免れ難し。尤も寛話（とりとめのない内容の話）を以て敷衍する勿れ。坊刻（営利出版）の初學の爛套（陳腐な常套句）の如きは、起〔の部分〕に「大凡天下の事、亦た何ぞ常に之れ有るかな（大凡天下事、亦何常之有哉）」・「吾 甚だしくは夫の天下の事を解せず（吾甚不解夫天下事）」・「吾 今にして夫の天下の事を知る（吾今而知夫天下事）」及び「吾人 聖賢の業に従事す（吾人従事聖賢之業）」・「身を儒雅の林に置く（置身儒雅之林）」と「吾人 身を以て世を渉る（吾人以身涉世）」等の語を用う。甚だしきは「天下事、有一二端者（天下事、一二の端なる者有り）」・「吾故先舉其一二端以觀（吾 故に先ず其の一二の〔発〕端を舉げ以て觀（觀）る）」云云を用いるに至る。此等は切ならざる套語（決まりの言葉）なり。凡ての題に用う可ければ、久しく奉けたる功令（法令）もて嚴禁す。<sup>も</sup>倘し父師（先生）書を買うに慎まず、選讀 偶々忽せにし、一たび初學の肺腑に入らば、則ち病 膏肓に染まり、終身「救藥」（『詩經』大雅・板）を為し難し。父師と爲る者、宜しく常に警惕（細心の注意を払って気を付ける）を加うべし。即ち子弟 悞り此の本を購うも、亦た宜しく●（一字不明）出し、速やかに丙丁（代詞：私）に付すべし。起の一層の油腔（内容のない）に落ちざる可きを庶う（『増訂初學秘訣』三葉～四葉）。

「起」とは、起講の第一段落をいう。「開（導入）」部分である。いわゆる題を擒えて解法を始めるのは、ともにこの一段落の運用にある。思うに起講は本篇の綱領（要点）となる。そして起講の開（導入）も起講の綱領（要点）となる。網を広げるには必ず網をつかみ出すし、衣裳を整えるには必ず襟をつかむようなものである。題目の頂にどっしり腰を据え、説きだすに勢いがあることが必要である。したがって、「起」の部分は、頂を際立たせ青空に突き出るようにすべきである。最も平板であることを避ける。地中の龍脉が地上に現れると必ず高く険しい峰となるようなものである。こうしたことから、龍脉は地中に伏していたり、現れたり、あるいは開いていたり、あるいは戻ってきたりして、それぞれに勢いがある。山の尾根が平坦で、だらだらしたものであれば、一面が数里であっても、つまずかず落下せず、方向を変えず結実しない。つまりは龍脉のある場所ではないのである。こうしたことから、「起」の個所は、二句もしくは三句は、高く険しくして、だらだらとせず、ひとたび説き始めれば、英氣に満ちていることが必要である。もしも、「起」の個所においていちど起こし、また起こしたならば、頭の部分がどっしりしたものとなって、疊架（文章がくどくなる）となるのを免れにくい。もっともととりとめのない内容の話で文意を押し広めないようにする。坊刻（営利出版）の入門書の陳腐な

常套句は、この「起」の部分に「大凡天下の事、亦た何ぞ常<sup>およそ</sup>に之れ有るかな（大凡天下事、亦何常之有哉）」・「吾 甚だしくは夫の天下の事を解せず（吾甚不解夫天下事）」・「吾 今にして夫の天下の事を知る（吾今而知夫天下事）」・「吾人 聖賢の業に従事す（吾人從事聖賢之業）」・「身を儒雅の林に置く（置身儒雅之林）」・「吾人 身を以て世を渉る（吾人以身涉世）」などの言葉を用いている。ひどいものは、「天下事、有一二端者（天下事、一二の端なる者有り）」・「吾故先舉其一二端以觀（吾 故に先ず其の一二の〔発〕端を舉げ以て觀（觀）る）」などを挙げている。これらは、適切でない套語（決まりきった言葉）である。すべての題目の八股文の起講の「起」の個所に用いることができるので、法令で厳禁にすべきである。父師（先生）が、書物の購入を慎まず、例文の選択をいいかげんにし、ひとたび初学者の肺腑に入ってしまうならば、病が膏肓に染まってしまい、終身にわたって治療しがたいものとなる。父師（先生）となるものは、よろしく常々注意を払って気を付けるべきである。学生が誤ってこうした書物を購入したのならば、速やかに亦た宜しく出し、速やかに〔この書の筆者である〕丙丁（代詞：私）に引き渡すべきである。「起」の部分が内容のないものに陥ることのないことを願う、という。

続いて、承の段落については次のように説明する。ただ、起の段落が明白であれば、この承の段落は設けなくてもかまわないとする。

#### 論承一層法

承は起の数句の後の一層を謂うなり。起の意を承接して、之を講明するなり。單に一層を承けて、頓斷（間をおいて中断する）して再び轉ずる者有り。起に虚字の住脚（末尾）を用いず、起に連なり一層の頓斷（間をおいて中断する）を作す者有り。「盖（蓋）」字を用いて数句を頓（止める）して承を作す者有り。「夫」字を用いて数句を宕開（引き伸ばす）して承を作す者有り。更に中に蟬聯（連続する）する對の兩句、或いは對の四句を用い、上半は是れ承、下半は是れ轉にする有り。即ち所謂ゆる「中の一つの紐（かなめ）」是れなり。若し起の一層 已に説きて明白なれば、則ち必ずしも承けざるも亦た可なり。盖（蓋）し起講に亦た三層を用いる者有り。起・轉・收にして承を用いずと謂う者なり。承の一層の爛套（陳腐な常套句）なるに至れば、毎に「何也」を接用して隔斷（さえぎり）し、自問自答す。或いは「某也者」を用いて、下註の解よりす。「豈に憂憂として之を難しとせざらんや（豈不憂憂乎難之哉）」・「夫れ豈に故無くして然りと云うや（夫豈無故而云然哉）」・「天下の事は大抵 斯の如きなり（天下事大抵如斯也）」・「往往 然るなり（往往然也）」・「比比 皆な是れなり（比比皆是也）」に及ぶ。此等の切ならざる承〔の段落で用いられる〕句は、亦た宜しく禁革（禁止して取り除く）すべし、[そうすれば] 則ち承の一層 亦た油腔（内容のない）を免れる可きなり（『増訂初學秘訣』四葉）。

「承」は、「起」の数句のうしろの一段をいう。「起」の意味をうけて、それを明らかにして行く。たんに前の一段をうけて、間をおいて中断してまた別に展開する形のものがある。「起」に虚字の末尾をつけず、「起」の段落をうけ、間をおいて中断する形のものがある。「盖（蓋）」字

を用いて、数句で止める形のものがある。「夫」字を用いて、数句で引きのばす形のものがある。または、中に継続する対の二句、または対の四句を用いて、前半をうけて、後半を展開する形のものがある。このように「承」の部分は、いわゆる「中の一つの紐（かなめ）」というものである。もしも「起」の一段落ですでに明白に説いていれば、必ずしも「承」の一段を設けて、「起」の部分をうけなくてもかまわない。思うに、起講に三段落を用いる形のものがある。「起」・「轉」・「收」だけで「承」を用いない形である。「承」の一段の常套句といえ、いつも「何也」をつけて文の流れをさえぎり、自問自答する形がある。あるいは、「某也者」と言って、注の解釈を用いる形のものから、「豈に憂憂として之を難しとせざらんや（豈不憂憂乎難之哉）」・「夫れ豈に故無くして然りと云うや（夫豈無故而云然哉）」・「天下の事は大抵 斯の如きなり（天下事大抵如斯也）」・「往往 然るなり（往往然也）」・「比比 皆な是れなり（比比皆是也）」という形に至るものがある。「承」の段落で用いられるこうした適切でない句は、ただ禁止して取り除くべきである。そうすれば、「承」の一段はまた油腔（内容のない）ことを免れることができる、という。

そして、「轉」の段落について、つぎのように解説する。轉は、起講においては文章に動きをあたえる箇所であり、起講に轉の段落がなければ、ぼんやりとしたものになってしまうという。

#### 論轉一層法

轉は既に承くるの後の一層を謂う。承くる所の起の意を將<sup>もつ</sup>て又た轉出する一層なること、人の身を轉ずるが如し。轉ずれば則ち活潑なり。轉ぜざれば、則ち死相（絶え入りそうな様子）にして生氣無し。轉ずれば則ち靈動（生氣がある）なり、轉ぜざれば則ち蠢然たること土の木偶の如し。且つ今の龍燈（龍の形の燈籠）の舞う者は「龍燈を持って」必ず左轉し右轉し、其の燈の方に活動するが如し。若し一路（一本の道路）にして人の門首（門前）に至り、徑直（一直に）に拖去（ひっぱる）し並ぶに身を轉ぜざれば、又た何ぞ観るに足らん。故に愈々轉ずれば愈々力有り、愈々轉ずれば愈々勢い有り。若し初學の起講の轉ぜざれば、縦<sup>たと</sup>え能く題を擒<sup>とら</sup>えるも、究<sup>つい</sup>に止だ題に随いて一直に敷衍するのみ。但だ開口（話し始める）し即ち竭くるのみならず、亦た必ず醒快（すっきり）せず。轉の一層の套語（常套語）に至れば、毎に「然而して難きかな（然而難矣）」・「然らば亦た盡く然らざる者あるなり（然亦有不盡然者也）」・「然而して天下の事 亦た豈に一槩に論ず可けんや（然而天下事亦豈可一槩論哉）」、及び「乃ち人有り（乃有人焉）」・「乃ち一事有り（乃有一事焉）」・「抑そも然らざるを知るなり（抑知不然也）」・「孰れが天下の事 固より大いに謬りて然らざる者有るを知らん（孰知天下事固有大謬不然者）」を用うる者有り。此等の切ならざる轉の語は能く禁革（禁止して取り除く）を爲せば、則ち轉の一層は亦た油滑（内容のない）を免れる可し（『増訂初學秘訣』五葉）。

「轉」は、「起」を承<sup>う</sup>けた後の一段落をいう。承<sup>う</sup>けた「起」の意味を用いて展開する一段である。人が身を転じるようなものである。転じたのならば、生き生きとする。転じることがなければ、



絶え入りそうな様子となり、生気がないものとなる。転じたのならば、靈動（生気がある）し、転じなければ、生き生きとせずぼとした様子の土偶のようになってしまう。さらに今の龍の形の燈籠をもって舞うものは、龍燈をもって左や右に動き、龍燈が生き生きと動いているかのようにする。一本道で人の門前に至っているものに、一直線に引っ張ってそれぞれを動かさないのならば、またどうして見るに足るものとなろうか。それゆえに、転ずれば転ずるほど、ますます力強いものとなり、転ずれば転ずるほど、ますます勢いがあるものとなる。もしも初学者が起講を書くのに、転じなければ、たとえうまく題目をとらえていても、結局は題目に従ってまっすぐに敷衍するだけのものになる。ただ書きはじめて内容が尽き果ててしまうだけでなく、間違いなくはっきりしたものとならない。さて、「轉」の段落の常套句についてであるが、いつも「然而して難きかな（然而難矣）」・「然らば亦た盡く然らざる者あるなり（然亦有不盡然者也）」・「然而して天下の事亦た豈に一擧に論ず可けんや（然而天下事亦豈可一擧論哉）」、及び「乃ち人有り（乃有人焉）」・「乃ち一事有り（乃有一事焉）」・「抑そも然らざるを知るなり（抑知不然也）」・「孰れが天下の事固より大いに謬りて然らざる者有るを知らん（孰知天下事固有大謬不然者）」というものを用いるものがある。こうした適切でない「轉」において用いられる常套句は、使用することを止めてしまえば、「轉」の段落は内容がないということのを免れることができる、という。

最後に收の段落を解説する。「收」は、全体を収めるところとなるとする。

#### 論収（收）一層法

収（收）は後の一層を謂う。題位（題目の要求）を収合する處なり。或いは正収あり、或いは反収あり。俱に収得すること恰も題位の腔（言葉の調子）満ち氣足り（精神が満ちる）、悠揚として盡くさざるが如くす。既に侵溢（溢れかえらせる）せず、<sup>わずか</sup>絲毫も亦た[題の]本位（中心）を<sup>ふい</sup>落空にせず。截下等の題の如きは、下を留めることを要す。[それは]譬えば怒馬（駿馬）の奔馳（疾走する）し、崖に臨みて<sup>たずな</sup>韁を収（收）むるに、[名人であれば]一把すれば便ち自ら勒住（おさえとどめる）するが如し（止めたいところですぐに止められる）。<sup>まっすぐ</sup>平正なる單題は、兜（取り囲む）繳（まつわる）なるを要す。[それは]又た譬えば三たび軍の進み戦うを為すに、大将の旂脚 一たび<sup>さしず</sup>麾すれば、一齊に退下するが如し。倘し挖踏（だらだらする）して黏連（気にかかる）すれば、則ち尾 大にして運掉する能わず（尾が大きすぎて振れない：上よりも下の勢力が大きく統制が取れない）。若し収の開去すれば、則ち題神に<sup>にた</sup>肖らずして、題位（題目の要求）に合わず。[それはたとえば]氣（精神）已に足れば、[それ以上は]卻って又た添説（よけいなことば）なるが如し。則ち所謂ゆる足下に足<sup>つけ</sup>を贅るなり。又た豈に善き収と謂う者ならんや。収の處の套語に至れば、則ち「大いに彰明較著ならざるや（不大彰明較著哉）」・「豈に人をして大いに思う可からざらしむるや（豈不令人大可思耶）」・「抑そも又た何ぞや（抑又何也）」・「抑そも然らざるを知る（抑知不然）」及び「豈に其れ然らん哉（豈其然哉）」・「豈に人をして悠然として神往



せしめざらんや（豈不令人悠然神往哉）」・「能く人の鄭重分明の想を動かさざらんや（能不動人鄭重分明之想哉）」、並びに「一たび低徊し一たび神往す（一低徊一神往）」・「之が為に躊躇す（為之躊躇）」・「之が為に四顧す（為之四顧）」等の語有り。切ならざる収の句は、尤も厭う可きに属す。師 能く痛く懲責（処罰）を加え、永しえに禁じて之の語を用いざらしめば、則ち収は亦た滑調を免るる可きなり（『増訂初學秘訣』・五葉～六葉）。

「収」は、最後の一段落を謂う。題目が要求（題位）するところを、収めて合わせる段落になる。正収があり、反収がある。両者ともに題目が要求（題位）する言葉の調子に満ち溢れ、その精神を充たし、ゆったりと落ち着いて尽き果てないように収める。題位（題目の要求）を溢れかえすようなことをしなかったからには、わずかでもまた題目の本位（中心）を落空にしない。截下題のようなものは、截去された下の語句を留めることが必要である。それはあたかも駿馬が疾走して、崖に臨んで手綱を取る時、名人であれば一握りするだけでおさえとどめられるようなものである。変化のないまっすぐな單題は、取り囲んでまつわらせることが必要である。それはあたかも三たび進軍して戦おうとする時、総大将の軍旗がひとたび指図すればいっせいに退却するようなものである。もしも、だらだらするして気かければ、尾が大きすぎて振れない（上よりも下の勢力が大きく統制が取れない）ことになる。もしも「収」の段落でそれまでのものを「収め合さず」ばらばらにしてしまえば、題目の意味するところをとらえきれず、題目の要求にも合致しない。それはたとえばすでに十分に題目の気（精神）を満ち溢れさせてしまえば、それ以上はかえって又た添説（よけいなことば）になるようなものである。足のしたに足を付け足すことになる。どうしてすぐれた「収」の段落といえるであろうか。「収」の段落の常套句についていえば「大いに彰明較著ならざるや（不大彰明較著哉）」・「豈に人をして大いに思う可からざらしむるや（豈不令人大可思耶）」・「抑そも又た何ぞや（抑又何也）」・「抑そも然らざるを知る（抑知不然）」及び「豈に其れ然らん哉（豈其然哉）」・「豈に人をして悠然として神往せしめざらんや（豈不令人悠然神往哉）」・「能く人の鄭重分明の想を動かさざらんや（能不動人鄭重分明之想哉）」・「一たび低徊し一たび神往す（一低徊一神往）」・「之が為に躊躇す（為之躊躇）」・「之が為に四顧す（為之四顧）」等がある。適切でない「収」の句は、もつとも避けるべきものに属す。教師はうまくつよく処罰を加えて、永遠に禁じてこうした常套句を用いないようにさせる。そうすれば、すべて外れたような調子を免れることができるのである、という。

このように起講は起・承・轉・収の四段落に分けて作成される。ただ、これだけでは平板であると考えられた。そこで、それに変化をつけるために反正法や開合法というものを加える。反正法は、反起正収法とか正起正収法などのように、組み合わせで用いたり、反説だけ、もしくは正説だけを用いたりすることもできる。しかし、開合法は開と合を組み合わせで用いる。

（つづく）